

特集 協同組合が結ぶ「つながり」の今

02

医療福祉生活協同組合が育む地域のつながり
「たまり場」とおした組合員、地域住民、行政間の交流

小田巻友子（立命館大学大学院経済学研究科博士後期課程）



たまり場「ひだまり」

はじめに

医療福祉生活協同組合（以下、医療福祉生協）では、医療・介護サービスの提供のほかに、班やサークル、ボランティア活動が盛んに取り組まれている。これらは、組合員の意見を吸い上げ、組合員が中心となって活動し、地域との「つながり」を創出する場として機能している。

今回の取材ではその中心的な「場」となっている、ヘルスコープおおさかのあかがわ生協診療所のそばにある、たまり場「ひだまり」を訪問し、組合員、地域住民の方々から医療福祉生協において感じる「つながり」とは何かについてお話をお聞きした。

ヘルスコープおおさかの概要

今回ご協力いただいた生活協同組合ヘルスコープおおさか（以下、ヘルスコープ）は、大阪市東部を中心にコープおおさか病院、9カ所の内科診療所、4カ所の歯科、訪問看護ステーション、通所リハビリ、通所介護、訪問介護、居宅介護支援、認知症専用のグループホーム等の幅広い事業を展開している。大阪府下を定款地域に、76,000世帯近くの組合員を有する全国で4番目に組合員数の多い医療福祉生協であるⁱ⁾。

ヘルスコープには、組合員や地域住民がつどい、活動・交流する「たまり場」が計11か所存在する。今回訪問した大阪市旭区には、2011年12月開設した「ひだまり」と、2012年2月開設した「よってこ」の計2カ所のたまり場がある。

たまり場とは？

—「ひだまり」の事例

たまり場「ひだまり」は、月曜日～金曜日に開

表 1 たまり場「ひだまり」の利用方法

開館日	開館時間	活動内容	対象
月～金	午後 1 時～ 4 時	一般公開	組合員、地域住民、 行政関係者など (誰でも利用可能)
	それ以外の時間	班会、サークル活動 支部会議	組合員

館している。組合員の当番制で、最低 2 人のスタッフが常駐するようにしており、「ひだまり」の利用者は 1 日約 25 人～ 30 人、月平均 400 人にのぼる。あかがわ生協診療所に隣接しているため、診療の待ち時間や利用後に立ち寄ってコーヒーを飲んでおしゃべりしたり、折り紙をしたり、人によってたまり場での過ごし方は様々である。

午後 1 時～ 4 時の時間帯は、「一般公開」として、組合員以外の一般の人でも自由に利用できる。一般公開以外の時間帯には、健康チェックや脳生き生き班会といった班会やサークル活動、支部の会議など、組合員による活動が行われている（表 1 参照）。

たまり場の運営には、ヘルスコープから家賃や水光熱費として月 5 万円の支援がでる。足りない分は、祭りや食事会を開いたり、コーヒーを 1 杯 50 円で提供したりして、採算をとれるようにしている。



ひだまりを運営している
生江支部の支部長戸坂志充さん。



組合員の皆さん。たまり場には必ず 2 人以上のスタッフが常駐するようにしている。

組合員どうしのつながり

（1）健康チェックや脳生き生き班会

組合員どうしのつながりが見られるのがたまり場で開催される班会である。「ひだまり」では、足指力、握力、塩分濃度を測定する健康チェックをしたり、脳生き生き班会として新聞や本などのから興味深い文章を見つけて皆で唱和したり、1 人ずつ一か月間何をどう頑張ったのか 1 分間スピーチをしたりと、楽しみながら学び、健康を維持する活動を行っている。

その他にも、様々なサークルや講座が提供されている。琴やオカリナ、ハーモニカ、フラダンス、男の料理教室などが、たまり場やあかがわ生協診療所（以下、診療所）2 階の組合員ルームにて開催される。診療所の水光熱費に配慮して、組合員ルームの利用料金は 1 人 100 円と設定されている。しかし、指導はすべてボランティアによ

て担われているため、月謝等は存在しない。

(2) スタッフの成長

赤川4丁目には、旭区のもう1つのたまり場、「よってこ」がある。ある時、組合員の男性が認知症の奥さんを連れて「よってこ」にやってきた。当初は、周りがいくら勧めても自分でお茶を飲むことさえできなかった奥さんだったが、50代の男性ボランティアスタッフの丁寧な対応によって、次第に心を開き、自分でお茶を飲めるようになった。

元来控えめであったその男性スタッフも変化し、お楽しみ会でも踊りを披露し盛り上げる。今では、「よってこ」が喫茶店のようにコーヒーを提供していることから、親しみを込めて、男性スタッフは“「よってこ」のマスター”と呼ばれている。この事例は、たまり場が、ボランティアの育ちの場になっていることを示している。



足指力の計測器。赤川地区の健康チェックでは、セルフフットケア筋力アップと組み合わせた足趾力の検査と、握力検査、塩分チェックの3点を重視している。

配食サービス

あかがわ生協診療所地区（生江・赤川都島・中宮・旭東・旭陽・今市）では、ボランティアによる配食サービスも行われている。食材は、購買生協や地域の店から仕入れ、1食300円で20数品目の栄養バランスが整ったお弁当を提供している。月・水・金、週3回、60食を用意し、診療所の組



折り紙同好会の作品。
本格的な作品が壁一面に並んでいる。

合員ルームにて食事会を開催している。食事会の利用者は基本的に70歳以上を対象にしており、演奏会や誕生日会などの趣向を凝らしながら継続している。

スタッフはすべてボランティアで構成されていて、献立作りからすべてを自分たちで考えてやっている。ほとんどが50代以上の主婦の方だが、60代後半から70代のスタッフが実は一番多く、中には80代の方もいる。ヘルスコープおおさかの常務理事で、ボランティアコーディネーターとして、配食サービス設立時から携わっている小森佳子さんは「年齢を重ねると、遠慮するような発言をする方もいるが、年齢にあったやれることをやってもらう、それがボランティアだ。」と話す。

月1回、第一金曜日には、30人ほどのボランティアスタッフが集まって定例会を開催し、問題を共有する場が設けられており、スタッフの意欲は非常に高い。

行政とのつながり

組合員ルームでの食事会に来られない人のために、見守りを兼ねた配食サービスを、地域包括支援センターと連携をとりながら

行っている。留守等で配食ができず、連絡もとれないとなると、医療福祉生協から地域包括支援センターに連絡をいれる。また、地域包括支援センターから、この家にも配食をお願いできないかといった問い合わせが入ることもある。

お弁当は、現在、診療所の厨房で作られているが、診療所が建設される以前から個人の家を借りるなど場所を確保しながら、約 25 年～30 年ほど活動を行ってきた。長年の地域貢献が認められ、社会福祉協議会から推薦を受け、大阪市からも表彰された。

地域の健康づくりにも一役かっている。生江連合振興町会長の西澤祥淳にしざわしょうじゅんさんを通じて区の保健福祉センターから依頼があり、たまり場を解放して区の職員と一緒に健康チェックを実施した。このことがきっかけで行政からの認知が進み、地域の評価もあって、現在は社会福祉協議会から年約 4 万円の補助を受けている。一たまり場から始まった活動が、今では地域や行政も巻き込んで展開している様子が伺えた。

医師やスタッフとのつながり

医師や看護師は非常に親身になって、納得のいくまで対応してくれるというのが組合員の評価である。ある組合員は、「孫が頭を切った時、救急車に電話を掛けるよりもまず始めに医療福祉生協に電話をかけた。医師は飛びこみでも必ず対応してくれるし、まず相談することで最善策をとることができた。」と話していた。コープおおさか病院で夫の見取りを経験した女性の組合員は、看護師の対応の良さや患者の声に耳を傾けてくれる環境に心から感謝していた。

組合員も改善点があればしっかりと要求する。一般の医師と患者の関係ならば、病

院を替えることで示す患者の否定的な意見が、ここでは組合員の「発言」となって表れる。

実質的な改善の仕組みも存在する。ヘルスコープでは、各地区で月 1 回事業所利用委員会が開催され、ご意見箱に投函された市中の声を吸い上げ、事業所に組合員の声を届ける。そして、意見の中で気になることがあれば本部にまで上げる一連の改善システムが機能している。このご意見箱は診療所だけでなく、たまり場にも設置されており、たまり場は市中の情報源ともなっている。

地域とのつながり

たまり場は組合員でなくても気軽に使ってもらっている。しかし、組合員の輪を広げることが目的のひとつでもあるので、医療福祉生協の考え方やシステム、事業内容を少しずつ話しながら、加入の働きかけをする。その結果、たまり場利用者のほとんどが生協に加入する。

公共施設であるコミュニティ会館の利用料は 2000 円であるのに対し、たまり場の利用は無料である。そのため、町会の役員も気軽によって来る。そのことが医療福祉生協と町会とのつながりづくりに役立っている。

診療所の真向いには、西澤さんが住職をつとめる金光寺というお寺があり、0 歳～2 歳児を対象とした保育園を運営している。取材当日はちょうど園児たちがヘルスコープおおさかのグループホーム「花しょうぶ」に訪問に行く日であった。このような試みは初めてだそうだが、そのほかにも、地域の小学生が夏休みに参加する流しそめんのイベントや、「地藏盆」と呼ばれる

お地藏さんのお祭りも花しょうぶで開かれるなど、医療福祉生協が地域の中に根付いている様子が伺える。

ヘルスコープ常務理事である小森さんが音頭をとり始まった、毎年夏に開催される「生江 de ワイワイ元気まつり」は今年で第8回を迎えた。生江校下地域活動協議会、生江商店会、ヘルスコープおおさか（あかがわ生協診地区）の3団体によって実行委員会が構成されている。単なる医療福祉生協の祭りに終始するのではなく、「地域全体でつくるまつり」にこだわっている。地域の活性化と安心のまちづくりを目的に、町内会、老人会、子ども会、商店会、スーパーなど町内にある組織や団体を巻き込んで開かれるまつりを皆楽しみにしているというⁱⁱ⁾。



生江連合振興町会長（金光寺住職、同保育園園長）の西澤祥淳さん。調査日には、金光寺保育園の園児たちが、ヘルスコープおおさかのグループホーム花しょうぶに交流に出かけていた。

家族とのつながり

母親と息子の親子2人で、たまり場に参加している方もいる。息子さんは50代と若いが、母親が診療所の食事会に通うようになってから、母親が寂しくないようにと、特例で食事会に参加するようになり、

たまり場にも一緒に来るようになったそう。息子さんは診療所に来るようになってから、ご自分の行動範囲も広がったと話していた。

単身高齢世帯の見守り

一方で、組合員の多くは高齢の単身世帯である。たまり場のある大阪市旭区は、高齢化率、単身世帯数ともに高い地域とされている。

総務省統計局の平成22年度調査によると、65歳以上の人口構成比は大阪市22.7%なのに対して、旭区26.3%である。さらに、旭区の65歳以上の単身世帯は6,488世帯、60歳以上だと8,143世帯に上りⁱⁱⁱ⁾、総世帯数に占める割合は65歳以上の単身世帯が14.8%、60歳以上で18.6%を占めており、それぞれ大阪市の13.5%、17.5%を上回る。

そのような単身高齢者の見守りの場となっているのもたまり場である。たまり場への参加は強制ではないが、顔が見えないとなると話題に上がる。体調を崩しているのではないか、と皆が考え、情報交換することで必然的にチェック機能が働く。

世間では単身者の孤独死が社会問題化し



2014年11月17日取材時の様子。この日、取材に合わせて行われた班会には20名ほどの方が参加されていた。

ているが、生江老人会連合会会長の宮城景一さんは「この地域は高齢者が多いが、孤独死は存在しない。私も常に町を回りながら、見守り活動を町全体で取り組んでいる。」と語ってくれた。

おわりに

医療福祉生協における医療や介護サービスはいわば、購買生協における「商品」にあたる。しかし、医療福祉生協には、自宅と診療所が離れている、まだまだ元気なため積極的にサービスを利用する機会がない、といった様々な理由から医療・介護サービスを利用しない組合員が一定数存在する。では、医療や介護サービスといった「商品」以外の医療福祉生協の魅力はどのような点にあるのだろうか。今回の取材を通して、その1つが「医療福祉生協を通して育まれる人と人とのつながり」であることがわかった。組合員からは、このたまり場にくることで「安心」を得ているとの声も聞いた。

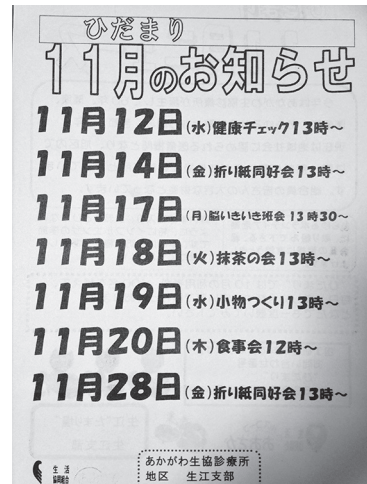
ヘルスコープが特筆されるべきことは、たまり場を介した同じ“住民”どうしの開かれた交流の中で、「地域とのつながり」を深めている点である。

これまでの医療福祉生協の地域貢献が「可視化」し、新たな地域のつながりを生成する「場」として、たまり場の存在価値はますます大きなものになっていくだろう。

謝辞

本稿の執筆にあたり、ヘルスコープおおさか常務理事小森佳子様をはじめとして、たまり場「ひだまり」にお集まりの皆様にご協力いただきました。貴重な機会と情報

を提供していただいたことに、心から感謝申し上げます。



ひだまりでは、様々な会が開催され地域の憩いの場となっている。

注

- i) ヘルスコープおおさかホームページ [<http://www.health-coop.jp/pub/>](2014年11月24日ダウンロード)。
- ii) まつりをつくる元気をつくる 生活協同組合ヘルスコープおおさか 赤川都島支部・生江支部・中宮支部・旭陽支部・旭東支部・今市支部: comcom11月号 [<http://hew.coop/2012/10/7905.html>](2014年11月24日ダウンロード)
- iii) 総務省統計局 平成22年度国勢調査